

中国語中国文学

◇教員◇

教授：大西克也、齋藤希史、鈴木将久

助教：市原靖久

◇学生◇

学部：5名、修士課程：10名、博士課程：7名

(1) 中国語中国文学専修課程の概要

亀の甲羅や牛の骨を焼いて神の意志を問いかけていた時代から 21 世紀まで、中国語ほど長い歴史を持ち、多種多様な思惟や感情を記録してきた言語は世界でも稀である。中国語中国文学専修課程が対象とするのは、この歴史の全てである。中国文明はその周辺に無数の多彩な文化を育み、日本・韓国・ヴェトナムでは漢字を学んで作られた文字がそれぞれに独自の思惟や感情を綴ってきた。また中国の西方は砂漠や大山脈によって隔てられながらも、常にインドや西アジアの大文明に向かって開かれ、多くのものを吸収した。中国語中国文学の歴史は絶えざる文化交流の歴史でもあった。

本専修課程には、この長い歴史を扱うにふさわしい多彩な教員が揃っており、中国語中国文学の幅広い領域をカバーする。

次に本専修課程の特色として挙げたいのは、学生や研究員に外国人の多いことである。特に大学院生や研究生には中国・台湾・香港などアジア諸地域からの留学生が多く、また、海外からの外国人研究員（訪問学者）も常に数名が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、授業や合宿にも外国人研究者の参加を迎えて、学生との交流が活発に行われている。

外国人留学生の数は、研究生も含めれば、2024年4月現在、中国・台湾からの留学生 17 名が在学している。留学生の参加は授業のあり方にも影響を与えており、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。日本人学生にとっては、いながらにして中国語会話が上達し、我が国とは異なる様々な見方や研究方法が学べるという点で極めて恵まれた環境である。

(2) 専任教員の紹介

大西克也教授は「上古漢語」と呼ばれる紀元前の中国語文法を専門としており、『論語』『孟子』『左伝』『史記』などの日本人にも馴染み深い古典を研究材料とし、個々の動詞や名詞の文法的特性を丹念に記述しつつ、上古の中国人が言葉によってどのように身の回りの世界を認識し、カテゴリー化していたのかという関心から、上古中国語の文法構造の解明に力を注いでいる。また、近年脚光を浴びている戦国秦漢時代の出土文字資料をいち早く文法研究に取り入れるとともに、文法、音韻などの総合的な角度から新出土の文字を解読、言語表記システムとしての漢字の歴史にも関心がある。主な著書・論文に、『アジアと漢字文化』（共著、放送大学教育振興会、2009）、「中国語における指示性範疇化の胎動（『中国語学』261号、2014）、『戦国縦横家書/馬王堆出土文献訳注叢書』（東方書店、2015、大櫛敦弘との共著）、「論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能」（『歴史語言学研究』第13輯、2019）などがある。

授業では、戦国時代の出土文字資料の解読や、漢字・文法・音韻史をテーマとした講義、古代中国語文法に関する論文の講読を行っている。

齋藤希史教授は中国古典詩文を専門としつつ、近代に及ぶ東アジアの言語と文学にも研究領域を広げている。先秦以来の歴史をもつ伝統詩文は、それを記した漢字とともに東アジア全域に広く伝播し、多様な文字世界を形成した。齋藤教授の近年の関心はこうした世界における“読み書きする主体”のありかたに向かっており、『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』（新潮選書、2014）、『漢文脈と近代日本』（角川ソフィア文庫、2014）などでは、古典詩文研究者ならではの切り口で東アジアの文字や言説を分析する。また、『漢詩の扉』（角川選書、2013）では、詩によって自らの生の輪郭をさだめた詩人たちの姿を描き、『詩のトポス 人と場所をむすぶ漢詩の力』（平凡社、2016）では、洛陽から西湖や涼州などを経て、長安、江戸へと至る土地と詩の結びつきを浮き彫りにする。『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）でサントリー学芸賞、『漢文スタイル』（羽鳥書店、2010）でやまなし文学賞を受賞。新刊に『漢文ノート 文学のありかを探る』（東京大学出版会、2021）、『アジア人物史 第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』第4章「六朝時代とは何であったか——アジアの名文集『文選』の誕生まで」（集英社、2023）がある。

授業では、2年生以上向けに、「古典詩文入門」として中国古典詩文を読

むための基礎と新たな視点を身につけるための初級演習及び東アジアの漢詩文を視野に入れた「古典詩文選読」を開講している。学部・院生共通の「漢魏六朝詩文選読」「古典文学芸術論選読」では、原文を正確に読み解く読解力を養い、漢籍に直接触れることを重視している。大学院向けの「東アジア人文学の諸問題」では、多様な研究テーマの学生との討論を主体に講義を進めている。

鈴木将久教授は中国現代文学を専門としている。特に 20 世紀初頭から中頃にかけて、中国が西洋と接触し、近代に向き合わざるを得なくなった中で、伝統文化をどのように変容させながら新しい文化を生み出したかを、西洋発の思想と中国の現実の相互関係として動的に読み解くことに関心を持っている。著書『上海モダニズム』（中国文庫、2012）では、西洋伝来のモダニズム文学が中国においてたどった複雑な運命を、中国の歴史に即して考えることを試みた。また現代中国の知識人の活動にも関心を持ち、現在の中国の人がどのようなことを感じ、考えているかを日本に紹介している。主な翻訳書に『中国が世界に深く入りはじめたとき』（賀照田著、編訳、青土社、2014）、『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか』（柴静著、共訳、平凡社、2014）、『誰も知らない香港現代思想史』（羅永生著、共編訳、共和国、2015）、『中国はここにある：貧しき人々のむれ』（梁鴻著、共訳、みすず書房、2018）、『思想史の中の日本と中国』（孫歌著、東京大学出版会、2020）などがある。

授業では、中国現代文学のテキストを深く読む訓練と広く読む訓練をそれぞれ別の科目で行っている。深く読む授業では原文を正確に読み解く力を養成し、広く読む授業では、参考文献を使いながら、テキストに関連する事項を広く理解し、その作業によってテキストの豊かな意味を複眼的に読み解く力を養成している。

市原靖久助教は、先秦の中国語文法を専門とし、特に代名詞が文中あるいは文章中で果たす役割、意味や機能に関心を持っている。主な業績に、「上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について」（『中国語学』265号、2018）、『春秋左氏伝』における指示詞の意味と機能」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』24号、2021）などがある。

（3）学内外講師など

本専修課程では、学内外から講師を招聘し、授業科目の充実を図ってい

る。学内の講師の科目には、東洋文化研究所の上原究一准教授による「明清通俗文学研究法」「明清白話小説選読」、総合文化研究科の谷口洋教授による「楚辞『天問』講読」、吉川雅之教授による「香港の文学と言語」、田口一郎教授による「釋大典『詩語解』講読」がある。

学外からは、中国語圏の語学・文学・文化について、佐々木勲人・筑波大学教授による「中国語学概論」、松浦史子・二松學舎大学教授による「漢～隋唐代の中国神話の受容と発展」、宮本徹・放送大学准教授による「中古音概論」が開講される。この他、張佩茹・東北大学准教授による中国語の授業、王俊文・成城大学准教授によるアカデミック・ライティングが開講される。

以上、先秦から現代までの中国の言語・文学・文化を扱う授業を展開しており、受講者は幅広く学ぶことができる。

(4) 中国留学制度と就職状況

本専修課程からは毎年、日中両国政府交換による政府奨学金留学生として、学部生や大学院生が、北京大学、復旦大学、南京大学などに留学している。また香港中文大学との交換留学協定によるサマースクールへの参加など、様々な留学・訪問制度が充実しており、それらを活用して研究の進展や語学力の向上を図っている。

学部卒業後は大学院に進学し、研究者への道を歩む者が多いが、中国に対する社会的関心の高まりから、日本経済新聞社・NHK・吉本興業・東方書店・明治安田生命・野村證券・JCB・コニカ・ミノルタ・アフラック・NTT 東日本など、新聞・テレビ・出版のほか、メーカー・商社・金融・通信・コンサルティングなど各種企業に就職して活躍する者も多い。

私たちはみなさんがともに中国研究の大海に乗り出してくださることを心待ちにしている。授業風景や留学・就職状況などについては、中文のホームページ委員会が編集している中国語中国文学研究室ホームページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/chubun/>)も参照していただきたい。